

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Douglas S. Massey and J. Edward Taylor, eds.

*International Migration: Prospects and Policies in a Global Market*  
Oxford University Press, New York, 2004, x+394pp. (International Studies in Demography)

本書は、国際人口学会 (IUSSP) の South-North Migration 委員会によって組織されたシンポジウムにおけるペーパーの集大成である。Graeme Hugo, Philip Martin, Min Zhou, Guillermina Jasso, Michael Fix などの著名な移動研究者による論文が含まれている。編集は South-North Migration 委員会の中心メンバーである Douglas Massey と Edward Taylor が行っている。この委員会は1998年に *Worlds in Motion: Understanding International Migration at the Millennium* を出版しており、今回の *International Migration: Prospects and Policies in a Global Market* は、その続編である。

South-North Migration 委員会は1990年代から次々と研究成果を発表し、国際移動研究に多大な貢献をした。なんといっても大きかったのは、国際移動という複雑な現象を理論的に整理した事であろう。それ以前までもっぱらシンプルな経済理論や Push-Pull 要因で説明されていた国際移動を、様々なレベルから多角的に説明する枠組みを提示した。彼らの国際移動の理論に関する論文が発表されて以後、提示された理論的枠組みを元に多くの実証研究が活発に行われている。*Worlds in Motion* においてもヨーロッパ、北米、アジアなど世界を各地域ごとに分け、それぞれの地域に見られる国際移動はどの理論的枠組みによって最もうまく説明できるのか、という点に多くの紙数が割かれていた。しかし、同書では理論的枠組みを重視するあまり、その枠組みが機能する以前の条件である国レベルの移動政策に注意が向けられておらず、筆者にはそれが不満であった。

前作に対する筆者と同様の不満が噴出したのか、今回の *International Migration* では、国際移動政策にウエートを置いている。第1部は、世界各地域における国際移動の動向、特徴及び展望、第2部は移民送出国の政策、第3部は移民受入国の政策、そして第4部は今後の国際移動に関する展望、研究・政策に関するまとめ、という構成になっている。

国際移動政策という点、移民受入国における政策が焦点となっている感がある。第3部では、移民受入国が以前にも増して外国人の入国に対し制限的な政策を採りつつあることが読みとれる。一方、第2部を読むと、アジアの主要な移民送出国において、国際移動は既に開発政策の柱の一つとなっていることがわかる。かつて移民送出国にとって、移民は貴重な人材の海外流出を意味していた。交通手段、コミュニケーション手段が発達した今日、移民からの送金規模は巨大化し、移民送出国は外貨を獲得するため、また国内の失業水準を緩和するため、積極的に国際移動と送金を奨励する政策的な方向付けを行っている。

筆者にとって興味深かったのは Taylor による第9章である。彼は、移民による送金が移民の送出地域に及ぼす効果について分析を行っている。1990年代以前の研究では、移民からの送金が送出地域へ与える経済効果は無に等しく、地域の経済発展に寄与しないとされてきた。Taylor は New Economics of Labor Migration (NELM) の見地から独自の調査を行い、移動の要因と移動が送出地域に与える影響には密接な関係があること、移民からの送金が地域の経済発展に大きな貢献をしていることを示している。要因と影響の関連については、NELM 理論の説明力が高いことを示しており、今後注目したい。

残念なのは送出国政策の対象がフィリピンに偏っていること、受入国政策の対象が欧州と米国中心であり、日本や韓国等のアジアの移民受入国についてあまり触れられていないことである。しかし、本書も前作同様、広く引用される文献になることは間違いない。 (千年よしみ)